

金剛流能楽師尾崎浪音の足跡

林 和利

一、はじめに

尾崎浪音は、明治・大正期に名古屋で活躍したシテ方金剛流の能楽師である。当時、名古屋の能楽界をリードした人物の一人で、彼の存在によって金剛流はこの地方に大きな勢力を保っていた。近代名古屋の能楽史は、この人を抜きにしては語れないほどの大きな存在である。残された資料によって、その足跡をたどってみたい。

二、略伝・評伝

尾崎浪音の生涯について、その略伝が子息の玉銚たますけによって記されている。浪音の没後にまとめられた遺稿歌集『尾崎忠功翁家集』のあとがきとして記されたものである。まず、これをそのまま引用しておく。

通称宮一郎、諱は忠功、浪音と号す。慶応二年六月出生。幼時身体蒲柳の為、寺田左門治氏に就き能楽を学ばる。十八歳の冬、出でて東都に遊学し、傍ら宮内官後藤冬見大人を師として初めて歌の教を受け、二十六歳迄東京に在りて、同大人に師事すると共に間島冬道翁、松の門三艸子刀自を始め、京都なる池袋清風大人等の評点を乞ひ、二十七歳にして郷里に帰り、四十歳頃

迄石橋蘿窓翁に師事し、一面御歌所長高崎正風翁、同寄人小出繁翁、同参候植松有経翁、同寄人大口鯛二翁を始め諸大家の説を聴き、歌道に励精せらるると共に、金剛謹之助氏に師事し、専ら能楽を研鑽せらる。然るに、大正十二年に至り、軽微なる脳溢血に犯され、医師の勧告により能楽を中止し、只管歌道に精進せられしが、昭和三年五月十九日、再病魔の犯すところとなり、遂に不帰の客となる。

(読みやすさの便を考え、句読点のみ改めた。)

これによると、浪音が能を習い始めたのは、身体が蒲柳つまり虚弱であつたからだという。師匠は寺田左門治。寺田家は尾張藩抱えの金剛流大夫の家柄であつた。寺田左門治については、『名古屋市史 人物編』(名古屋市役所・昭43)に簡単な紹介がある。

養子鎗次郎、左門治と改称し、六世を継ぐ、嘉永四年五月、慶勝初人祝能の節、箴を勤む。時に年甫めて八歳。安政六年十月、茂徳初入祝能の節、舟弁慶の白浪を勤む。時に年十六歳。明治十八年、東京に移住し、行幸啓御能を拜命すること屢々なり。大正六年、当市に帰り、老後を静養し、後進を指導す。

左門治は研究熱心な実力のある能役者だつた。豊島弥左衛門著『弥左衛門芸談』(能楽書林・昭55)は、左門治を評して、次のように

述べている。

正々堂々と決まった型をまじめにやってみてゆく人であった。そして確かに力のある人であった。『西行桜』を直面で演じられたことがある。たぶん相当の年齢であったことと思う。それが、よく映ったのである。年をとっても直面でできる人であった。底力のある舞であったと覚えていて、『撰待』も見たことがあった。奇抜さのない、おとなしい芸を持った人であった。後になつて寺田氏の持つておられた本が手に入った。それを見るとやはり相当の人であったことが分かる。書き残された物や書き入れなどによって、研究の進んでいた人であると、分かるのである。

何歳で入門したかは不明であるが、幼時よりこのような力のある師匠について、しっかりと基本をたたきこまれたであろうことが伺える。以来、脳溢血で倒れる大正十二年まで約五十年ほどの間、能の道にあつた。あとで詳しく見るように、記録に残っている範囲に限つても、その舞台数の頻度はかなりのものである。

その間、上京して宮廷風の和歌の指導を受け、歌人としても才能を発揮するようになる。歌道においても浪音の實力は相当なものであつたようである。

また、名古屋に帰つてからは、金剛謹之輔にも師事している。謹之輔は、鮮やかな切れ味と朗々たる謡で知られた関西能楽界の重鎮であつた。師匠には恵まれていたと言ふべきであらう。

なお、前掲『家集』巻末に記された編者岡谷真詮のあとがきは、そのひとがらを知るに参考にならう。

尾崎忠功先生は、明治維新勤王の志士、尾張藩銀三郎忠景翁の嫡孫として、至誠至純、先憂後楽、現代稀に見る高潔の人、能

楽界に、歌界に行く所必ず一方の将として大いに将来を期待せしに、哀六十三歳を一期として忽然神去り給ひしは惜しみても猶余りある事ならずや、

遺稿集ゆえの社交辞令的要素を差し引いたとしても、なおかつ、誠実にして高潔な、優れた人物であつたことが伺える。

三、略歴

浪音の孫にあたる尾崎家の現当主正忠氏によって作成された浪音の略歴がある。これに基づきつつ、その生涯を時間を追つて、整理してみる。

一八六六(慶応二) 一歳

六月八日、父巖、母なをの長男として、広井仲ノ町で出生。

本名、宮一郎。

一八六七(慶応三) 二歳

一月二十七日、母没。祖父銀三郎忠景の勧めで、幼時より寺

田左門治について能を学ぶ。

一八七六(明治九) 十一歳

父再婚し、文部省官吏として上京したため、祖父の下で養育

される。

一八八二(明治十五) 十七歳

八月一日、祖父没。

一八八三(明治十六) 十八歳

父を頼つて上京。第一高等中学校(旧制一高の前身)に入学。

和漢の文学を学ぶ。バイオリンを習うとともにポートの選手であつたという。浜口雄幸と学友であつたと伝える。宮内官

後藤冬見大人を師として和歌の教えを受ける。父、その後官を辞し、名古屋に帰る。

一八八八(明治二十一)二十三歳

この前後、父、愛知県議會議員をつとめる。

一八九二(明治二十五)二十七歳

名古屋に帰り、覚王山月見坂に寓居。

一八九四(明治二十七)二十九歳

家督を相続。このころ、能の会「松風社」を興すか。ただし、当初は「尾崎社中」と称したらしい。

一八九五(明治二十八)三十歳

仲ノ町の本宅に転居。御歌所出仕の内命が再三にわたって下るが固辞する。

一八九六(明治二十九)三十一歳

五月二十一日、長男玉銚誕生。

一八九七(明治三十)三十二歳

このころ文人仲間と盛んに交流。画家や歌人が多数集まる。

(画家―伊藤翠雲・朝岡翠洲・森村宣稲・兼松蘆門・牧哲斉・島田素言・三浦石斉・大矢米年・渡辺杏堂、歌人―三浦義住・武田晨正・三輪徑年・大島為足・坂正臣・貝谷社陰・奥田大和)

一九〇〇(明治三十三)三十五歳

十一月、井上重兵衛と金毘羅・京都に遊ぶ。

一九〇三(明治三十六)三十八歳

四月、名古屋九曜会、那古野東照宮にて興行。五月二十四日、玉銚(八歳)、那古野神社能楽殿にて初舞台。「草紙洗小町」の子方をつとめる。このころ、「望月」を抜き、伊勢門水よ

り祝いの絵皿を頂戴する。

一九〇六(明治三十九)四十一歳

十月二十八日、名古屋九曜会が金剛流宗家を招いて、金剛善覚五百年祭名古屋能楽大会を催す。伊勢・岐阜・浜名湖方面など、東海各地から浪音の門弟が参集した。このころ、松風社中では百余名を数える。

一九〇八(明治四十)四十三歳

四月、愛知能楽楽師同盟作成の「楽師姓名」(名簿)の筆頭に「一級仕手(連及地謡ヲ兼ヌ)金剛流取締」と登録される。十月十七日、十八日、祖父忠景二十五年祭追善能楽会を那古野神社能楽殿にて開催。

一九一七(大正六)五十二歳

玉銚、愛知一中を卒業、早稲田大学高等師範部国語漢文科に入学。(翌年、専門部政治経済科に転科。)

一九一八(大正七)五十三歳

次女富士、片野東四郎(永東書店店主)に嫁ぐ。十一月二十日、玉銚、早稲田大学を退学し、親世左近の内弟子となる。

一九二一(大正十)五十六歳

東区下堅杉ノ町に転居。このころ、松風社中に内紛があるか。山田仁三郎が春鶯会を組織して別れた。

一九二二(大正十一)五十七歳

玉銚、名古屋通信局に勤務する。

一九二三(大正十二)五十八歳

五月、軽度の脳溢血で倒れる。医師の勧めで能楽界を引退。松風社は片野東四郎に託す。十月六日、玉銚結婚。

一九二八(昭和三)六十三歳

五月十九日、再度の発作で倒れ没す。戒名、備高院吟誉忠功居士。

明治四十一年、浪音四十三才のとき、愛知能楽師同盟が楽師の姓名と役職を記した名簿を作成している。これによると、その筆頭に掲げられ、「一級仕手」とあってシテ方の最高の位にランクされている。しかも、「金剛流取締」である。この時期、浪音は、名古屋における金剛流の総帥であるとともに、この地方のすべての能楽師を代表する実力者であったことが確認できる。

また、ちょうどそのころ、松風社の社中が百余名を数えたという。その明治四十年前後が、名古屋における金剛流の全盛期というべきだろう。現在の状況と異なり、この地方に金剛流の一大勢力の存在した時代があったという事実を押さえておきたい。

なお、長男の玉鉾は金剛宗家より養子話があたり、観世宗家からも将来を嘱望されるほどの技量の持ち主であった。

四、舞台歴

現在残されている各種能組の記録から、尾崎浪音の出演した曲目と役柄を抽出することにより、その舞台歴を可能なかぎり明らかにしてみよう。

調査の対象にした記録は、田鍋惣太郎編『お能の番組』(昭26)、雑誌『能楽』所収の番組、名古屋能楽師連盟の名簿に記された上演記録などである。なお、抽出の作業にあたっては、大倉流大鼓方寛鉦一氏が作成された能楽師別上演記録のカードと、椋山女子園大学飯塚研究室の「東海能楽データ・ベース」を活用させていただいた。

明治十年(十二歳)

十月二十日 (舞台不明)

奉献能 「船弁慶」シテ

明治三十五年(三十七歳)

三月二十二日 那古野神社能楽殿

愛知能楽会第十六回 「大会」シテ

明治三十六年(三十八歳)

五月二十四日 那古野神社能楽殿 「檀風」シテ

十月十七日 那古野神社能楽殿 「老松(紅梅殿)」シテ

十月十八日 那古野神社能楽殿 「夜討曾我」シテツレ

明治三十七年(三十九歳)

一月二十四日 那古野神社能楽殿

愛知能楽会第二十二回 「富士山」シテ

十二月四日 那古野神社能楽殿 囃子「弓八幡」

明治三十九年(四十一歳)

二月一日 富沢町小扇楼

幸友会囃子会 舞囃子「羽衣」「桜川」

三月二十五日 那古野神社能楽殿

愛知能楽会第二十七回 「百万」シテ

五月二十七日 那古野神社能楽殿

愛知能楽会第二十九回 「望月」シテ

十月二十八日 那古野神社能楽殿

金剛善覚五百年祭能楽大会 「淡路(急々舞)」

シテ

明治四十年(四十二歳)

一月二十日 那古野神社能楽殿

愛知能楽会第三十一回 「高砂」シテ・囃子「鉢木」

- 四月二十八日 那古野神社能樂殿 「加茂(替装束)」シテ
 明治四十一年(四十三歳)
- 二月十二日 (舞台不明)
 呉服町舞台地鎮祭 「神歌」・囃子「高砂」
 那古野神社能樂殿
 角淵翁還曆祝賀 「志賀」シテ
 茶屋町東照宮
 四月五日 徳川慶勝靈神の祭典(催主尾崎浪音) 囃子「鶴
 亀」
 五月十七日 仲ノ町尾崎浪音宅
 尾崎松風社春季会 素謡「隅田川」・囃子「邯鄲」
 名古屋能樂俱樂部
 六月十一日 宝生九郎名古屋立寄 「是我意」
 朝日神社 素謡「神歌」「鉢木」
 七月二十六日 西枇杷島町松風社(支部)
 観蓮謡会 素謡「藤戸」「鉢木」
 尾崎浪音宅
 八月一日 松風社例会 素謡「融」
 那古野神社能樂殿
 十月十七日 尾崎忠景翁二十五年祭(初日) 囃子「山姥」・
 仕舞「玉の段」
 十月十八日 同(二日目) 「羽衣(盤渉)」シテ・仕舞「春
 日龍神」
 明治四十二年(四十四歳)
 一月六日 (舞台不明)
 池内信嘉歡迎 囃子「羽衣」(太鼓信嘉)
- 一月十日 尾崎松風社(尾崎浪音宅)
 新年囃子会 囃子「高砂」
 二月十一日 尾崎松風社(尾崎浪音宅)
 月次例会 素謡「橋弁慶」
 六月六日 尾崎松風社(尾崎浪音宅)
 春季会 囃子「藤渡」
 茶屋町東照宮
 六月七日 義直靈神祭典囃子会 囃子「融」
 六月二十日 尾崎松風社(尾崎浪音宅)
 月次例会 素謡「熊坂」
 七月四日 尾崎松風社(尾崎浪音宅)
 月次例会素謡「雨月」「烏帽子折」
 八月一日 (舞台不明、おそらく尾崎浪音宅)
 尾崎忠景例祭 素謡「融」
 八月二十七日 尾崎松風社(尾崎浪音宅)
 金剛流月次素謡会 素謡「岩船」
 九月十九日 尾崎松風社(尾崎浪音宅)
 金剛流謡曲仕舞例会 仕舞「春日龍神」
 十月二十四日 能樂俱樂部(呉服町)
 「猩々」シテ
 十二月一九日 尾崎松風社(尾崎浪音宅)
 納会 囃子「猩々」
 明治四十三年(四十五歳)
 一月 尾崎松風社(尾崎浪音宅)
 新年会 「神歌」・囃子「高砂」
 三月十三日 尾崎松風社(尾崎浪音宅)

- 三月二十日 金剛会発会 素謡「神歌」「小鍛冶」
能楽俱樂部
- 五月七日 尾崎松風社(尾崎浪音宅)
松風社少年団九曜会発会 「神歌」
七小町普蔵寺
- 五月二十七日 松風社東京支部春季会 素謡「隅田川」・仕舞
「富士太鼓」
- 六月一日 共進会場内三井物産会社出品能舞台
松風社 囃子「鶴亀」・仕舞「融」
(舞台不明)
- 六月十九日 松風社 仕舞「遊行柳」
尾崎松風社(尾崎浪音宅)
- 八月一日 尾崎忠景霊神例祭 素謡「石橋」
熱田教育水族館楼上
- 八月二十日 名古屋金剛会納涼謡曲会 素謡「松風」・仕舞
「巻絹」「烏帽子折」
- 十二月十一日 尾崎浪音宅
弁財天例祭 囃子「枕慈童」
- 明治四十四年(四十六歳)
一月八日 尾崎松風社(尾崎浪音宅)
新年会 囃子「高砂」
鉄砲町伝光院
- 三月十二日 愛知金剛会 独吟「高野物狂」・仕舞「忠度」
尾崎松風社(尾崎浪音宅)
- 七月二日 金剛流謡曲会 素謡「安宅」
- 十一月五日 尾崎松風社(尾崎浪音宅)
大弁天祭典 金剛流謡曲会 素謡「竹生鳥」
- 明治四十五年(大正元年)(四十七歳)
一月七日 尾崎松風社(尾崎浪音宅)
松風社本部新年会 素謡「神歌」
中島郡森上新花楼
- 六月十二日 常盤会発会 素謡「神歌」
海東郡蟹江町宝蓮寺
- 六月十六日 九星(「曜」か)会 素謡「羽衣(盤渉)」
- 大正二年(四十八歳)
一月五日 尾崎浪音宅
弁財天例祭謡曲会 素謡「絵馬」
商品陳列館内龍影閣(門前町)
- 一月十二日 千年会稽古始謡曲会 素謡「富士太鼓」
能楽俱樂部
- 二月九日 名古屋能楽会 「鶴亀」シテ
名古屋能楽部
- 六月十八日 名古屋能楽会 一調「蟬丸」
能楽俱樂部
- 十月十二日 名古屋能楽会 「俊寛」シテ
名古屋能楽部
- 十一月二十三日 名古屋能楽会(乱能) 狂言「福の神」
名古屋能楽部
- 大正三年(四十九歳)
一月十一日 商品陳列館内龍影閣
尾崎松風社新年会 仕舞「杜頭杉」
能楽俱樂部
- 二月十五日

- 十一月五日
名古屋能楽会 「蟬丸」シテ
能楽俱樂部
名古屋能楽会 仕舞「藤戸」
- 大正四年（五十歳）
一月五日
尾崎浪音宅
弁財天例祭 小謡独吟「石橋」
能楽俱樂部
金剛会発会 「神歌」・素謡「高砂」・囃子「三輪」
能楽俱樂部
五月三十日
田鍋氏披露式能（二日目） 仕舞「野守」
尾崎浪音宅
六月二十四日
尾崎浪音宅
尾崎軒居披露 素謡「神歌」・囃子「猩々」
川名妙見堂
十一月二十八日
西村翁記念碑除幕式 囃子「養老」
尾崎浪音宅
十二月五日
御大典奉祝弁財天例祭金剛流謡囃子会
囃子「高砂」
十二月十二日
祖父江町上野屋
常盤会御大典奉祝謡曲会 独吟「石橋」
- 大正五年（五十一歳）
一月十六日
尾崎浪音宅
名古屋金剛会 囃子「白楽天」
（舞台不明）
二月二十六日
名古屋金剛会 独吟「阿古屋松」
鶴舞公園聞天閣
十月二十二日
霞会囃子会 囃子「猩々」・一調「鳥追」
- 十一月二十三日
名古屋金剛会本部
立太子礼奉祝弁財天祭典金剛流謡会
仕舞「実盛」
尾崎浪音宅
十二月十日
名古屋金剛会 仕舞「高砂」
- 大正六年（五十二歳）
一月五日
森田屋（中島郡森上）
常盤会新年謡初 素謡「神歌」
尾崎浪音宅
一月二十一日
尾崎浪音宅
名古屋金剛会 素謡「神歌」・仕舞「難波」
東照宮社務所
二月四日
田鍋社中霞会 囃子「羽衣」・一調「笠之段」
能楽俱樂部 「巻絹」シテ
仲ノ町金剛会本部
三月二十五日
名古屋金剛会第二十二回例会 仕舞「道明寺」
八月一日
商品陳列館内龍影閣
十一月二十三日
霞会秋季囃子組 囃子「枕慈童」・一調「鳥追」
- 大正七年（五十三歳）
一月二十日
名古屋金剛会本部
金剛会新年囃子会 「猩々」シテ
商品陳列館内龍影閣
二月三日
田鍋社中霞会 「三輪」シテ
- 大正八年（五十四歳）
二月二日
呉服町能楽堂
霞会新年囃子 一調「笠の段」
三月十六日
呉服町能楽堂

保能会発会 仕舞「山姥」
鶴舞公園開天閣

幸清次郎追善囃子会 「養老」シテ

四月四日

記録で見る限り、十二歳の「船弁慶」が初舞台ということになる。尾崎家に伝わる伝承から考えても、おそらくこれが実際の初舞台と見てよさそうである。ただし、その後の少年期から三十台前半の記録は不明である。

明治四十一年から同四十三年までの間の記録が最も多い。浪音四十三歳から四十五歳のときである。体力的にも経験的にも最も充実した時期であったことを示している。また、大正九年以降の記録が見当たらないが、脳溢血で倒れる数年前から、すでに舞台から遠ざかる傾向にあったものと思われる。

曲目別の上演頻度の上位は、能・舞囃子・仕舞・素謡すべて合わせて「神歌」が十一回、「高砂」七回、「羽衣」五回で、「融」が四回である。「神歌」は、「翁」の謡のことであるが、これを素謡形式で奏して、正式の「翁」の代用とされるものである。正月の演能など、祝賀的な要素のある場合に謡われているので、トータルの数が多いのは当然と言えるが、それを浪音が担当し得るだけの実力があり、その立場にあったことを示している。「高砂」が多いもの、この曲が脇能すなわち祝言能の代表曲であるためで、やはり同様の理由と考えてよい。

したがって、浪音自身の曲の好みをあえて上げるなら、「羽衣」や「融」のような曲ということになる。両曲の曲柄は異なるが、天女と融の優美な舞に共通点を見いだせようか。宮廷風の和歌を好んだ、いかにも浪音らしい趣味と言えるかもしれない。

五、尾崎家所蔵能楽関係資料

現在の尾崎家は名古屋市瑞穂区弥富町にある。現当主の正忠氏のご厚意で披見し得た能楽関係資料を紹介しておく。もちろん、浪音または玉鉾によって残されたものである。

1 尾崎忠功翁家集

謡曲を主題にした「能楽内百首」を収める。うち、短冊に記されたものの二首を本稿末に掲載した。

2 金春流山田家秘書

尾張藩大夫山田左兵衛家の秘書。明治三十四年十二月、浪音に譲渡されたもの。「風姿花伝」ほか次の十六の伝書を収録する。「聞書」「春藤家書」「春藤家書藤田元真書」「金剛家書」「金剛流一調」「音曲玉淵集拔書」「元真拔書」「金春金剛両家ノ面」「金春装束付」「金春能作物入用付」「装束道具寸法」「系図」「金剛流装束付」「金春家系図拔書」「雑録」。

3 風姿花伝抄

『風姿花伝』のうち「年来稽古条々」「物真似条々」「問答条々」「神儀」を収める。「明応八年九月 今春大夫八郎秦元安」の奥書のある伝本を、元禄四年に西村又八郎庫敬が書写し、さらにその子西村忠蔵敬元が宝暦六年に書き写したものの。西村は尾張藩お抱えの高安流ワキ方。

4 秘書

「節といひ章といふ論」ほかを収める。

5 歌舞一道奥儀聞書

- 6 秘伝替仕舞披(下)
天明八年五月、幸藤太郎の奥書。
- 7 謡本
「高砂」から「猩々」まで収録。型付入り。
- 8 謡本
「鶉飼」から「猩々」まで収録。
- 9 金剛流作物図解
金剛直喜筆。明治三十五年五月十七日、尾崎浪音の署名がある。
- 10 金剛流作物図(全)
金剛流型附
- 11 金剛直喜筆。「秘書禁他見」とある。
- 12 金剛流仕舞型附(全)
「高砂」から「鶴亀」まで百七十三番収録。「金剛謹之輔先生ヨリ受ク 大正四年五月三十日 浪音」とある。
- 13 狂言画
筆者伊勢門水。川瀬書店、大正八年発行。
- 14 能楽祝皿(織部焼)
伊勢門水画。
- 15 能楽花のしほり(上・下)
装束・道具の絵。島田延一画。堀井書店、明治三十九年発行。
- 16 能楽具装精華
深見坦郎画。檜書店、昭和十年発行。
- 17 大谷派大遠忌 式能記念帖
芸艸社、明治四十四年発行。
- 18 能楽泰斗金剛謹之輔 舞影一斑
写真集。飼田辰一著。芸艸堂、明治三十七年発行。
- 19 能楽百番(一回〜十二回)
月岡耕漁画。大黒屋書舗、大正十一〜十二年発行。
- 20 謡の基礎技術
三宅杭一著。東文書院、昭和四十四年発行。
- 21 観世流太鼓手附(全)(諸流異同弁)
観世元規著。木屋書肆、椀屋書肆、明治四十三年発行。
- 22 幸流小鼓手附(天・地・人)
三須平司著。大正七〜十五年。
- 23 謡本(観世流)
檜書店、昭和九年発行ほか。
- 24 謡本(観世流)
檜書店、昭和七年発行ほか。
- このうち、2の『金春流山田家秘書』に収められた「風姿花伝」は、金春系の一異本としてことに貴重であろう。宝山寺蔵金春旧蔵本(日本思想大系『世阿弥禅竹』所収)と校合の結果、これに近いものの、何度か転写を重ねたものらしく、明らかな誤写も見受けられる。「山田家」とは、尾張徳川家に召し抱えられていた金春流の大夫家である。もと金春流の地謡の家であったが、初世佐兵衛が元禄五年、藩主光友に召し出されて以来徳川家に仕え、嘉永三年に大夫格となっている。その山田家に伝えられていたものであることから、『風姿花伝』の、江戸時代の能楽界における流布状況が推察できて興味深い。
- この『秘書』の書誌は次のとおり。

①袋綴じ 一冊 縦一七・三センチ 横一二・〇センチ

②表紙 濃緑色の地に小さな花柄の模様をちらす

③題簽 表紙左肩 「金春流山田家秘書」と墨書

④行数 各丁片面に十行

⑤料紙 烏子紙

なお、この書が尾崎家に入った経緯について、巻頭に次のように記されている。

此書ハ金春流旧尾張家太夫山田佐兵衛先生ノ家ノ秘書也。某氏ノ所持セシヲ譲受ケテ参考ノ書ト為ス

明治三十四年十二月

尾崎浪音誌

また、3の『風姿花伝抄』は、金春系の伝本がワキ方にも流布していたことを示している。書誌は次のとおり。

①袋綴じにせず、一枚の紙の表裏に本文を記す 一冊 縦一八・〇センチ 横一七・〇センチ

②表紙 灰色無地の布製

③題簽 表紙中央 「風姿花伝抄」と墨書

④行数 一頁に十行

⑤料紙 檀紙(真弓の樹皮で作られた上質の和紙。縮緬皺がある)これが尾崎家に入った経緯は不明。

六、むすび

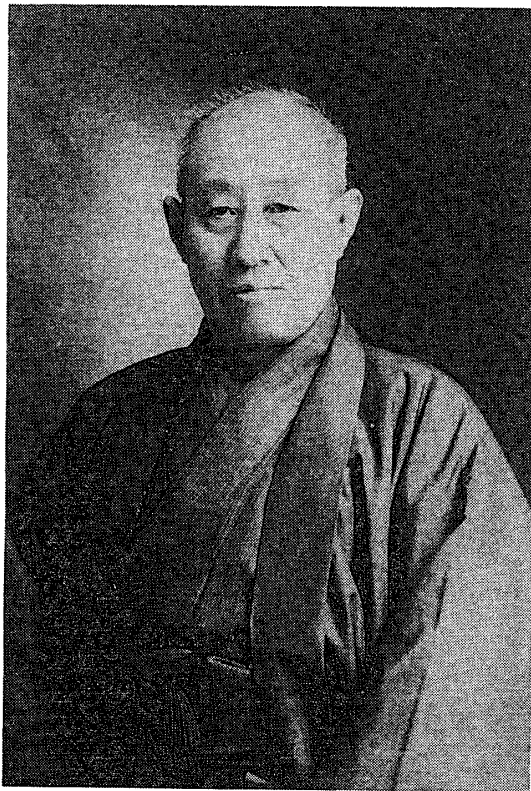
「芸どころ名古屋」という使い古された言葉がある。現在の名古屋は、その風土がやや衰退気味であるかの観があるが、昭和初期以前の名古屋は確かに芸能の盛んな土地柄であった。ことに明治期においては、さまざまな芸能人の活躍が見られる。そのことが、尾崎浪音という一人の能楽師の足跡を追ってみるだけでも、彷彿として

こよう。

浪音の生涯を取り上げたのは、たまたま身近に嫡孫がいてくださったという偶然もさることながら、近代名古屋の能楽史を明らかにする緒にしたいという意図があつてのことである。本稿が少しでもそのためのよすがとなるなら幸いである。

また、近年、名古屋在住の能楽師と研究者の有志によって、近代の東海地方における能楽資料の収集とデータ・ベイス化が進められており、その成果を生かしたいという気持ちもあつた。ともかくも、その最初に形になったものとして、後続の布石になりえようか。

なお、本稿をまとめるにあたり、尾崎正忠氏はじめ、笈鉦一、飯塚恵理人の各氏に格別のご配慮を賜つた。記して感謝申し上げます。



尾崎浪音肖像 (昭和二年四月六日撮影)

竹生嶋

鳥の海なみちのとかに「く舟は」ろにかゝる風たにもなし
忠功

「竹生嶋 嶋の海なみちのとかに「く舟は」ろにかゝる風たにもなし 忠功」

岐阜なる萬松館にて
離子會のありける日
笛つゝみしらへとのふそのひまにしはしなむるにはのみみちは 忠功

笛つゝみしらへとのふそのひまにしはしなむるにはのみみちは 忠功

「岐阜なる萬松館にて離子會のありける日 笛つゝみしらへとのふそのひまにしはしなむるにはのみみちは 忠功」